

なし 黒星病について



図1 花そう基部での発生



図2 葉（中肋部）での発生

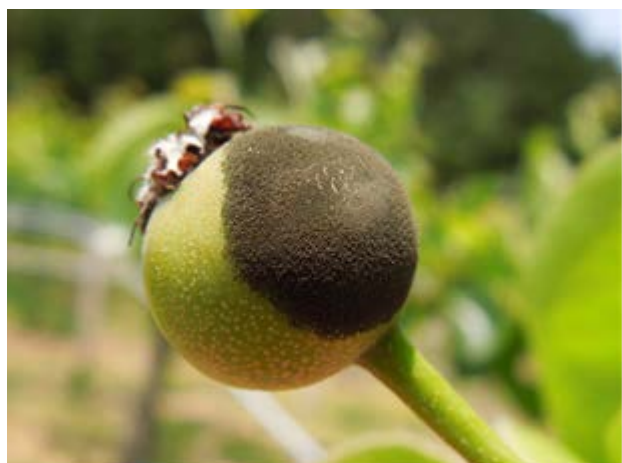


図3 幼果での発生



図4 発病果の裂果

1 生態

黒星病 (*Venturia nashicola* Tanaka & Yamamoto) は葉や新梢、果実などにスス状の病斑や果実の裂果が発生する。本病は品種によって発病に差がみられ、幸水・豊水では多く、新高が中程度、晩三吉では少ない。

第一次伝染源は前年の罹病落葉および罹病鱗片である。越冬した本病菌は春期に分生子を形成し、しだいに芽基部へ広がり、ナシの開花期頃から周辺に飛散する。鱗片部が感染していると、鱗片が花そう部に固着し、鱗片脱落期となっても落ちないため発病の目安となる (図1)。

葉での発病は、はじめ葉柄部、中肋部にみられることが多い。発病部位はややへこみ、やがて病斑部に黒いスス状の分生子 (図2) がみられる。なお、感染後の潜伏期間は若い葉ほど短く、老化するとその期間は長くなる。秋期に感染すると、「秋型病斑」と呼ばれる黒く薄汚れた病斑をつくる。

幼果期にはいずれの品種も感染しやすい。幼果に感染するとはじめ淡緑色の斑をつくり、その後そこに黒いススがみられる (図3)。幼果期以降になると徐々に感染しにくくなるが、幸水は6月以降感受性が徐々に高まり、7月上中旬頃にもっとも本病にかかりやすくなる。

2 発生状況

本病は開花2～3週間後までの降雨が多い年に多発する。また、5～6月に気温が低く、降雨が多いと発生が助長される。生育適温は15～20℃で、多湿条件時（濡れ時間9時間以上）に発生が多くなる。一次伝染源からの孢子飛散がはじまり、孢子の発芽に必要な水分（降雨）があると盛んに感染する。

葉や果実などで発病するとそこから二次感染を繰り返すため、発病葉や発病芽を園内に放置すると、風雨によって孢子が飛散し、被害が拡大する。

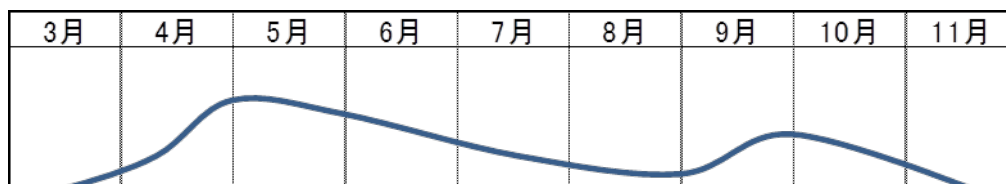


図5 黒星病発生消長

3 防除対策

(1) 伝染源の除去

前年の罹病葉が園内に残っていると、罹病葉上で子のう孢子が作られ、それらが飛散するため、落葉は集めて埋設するなど適正に処分する。また、春期に花こう部をよく観察し、発病が見られれば、根元より切除し、罹病葉と同様に処分する。発病部位はいずれも園内に放置するとそこから孢子が飛散するため、必ず園外へ持ち出す。

(2) 予防防除の徹底

栽培暦に従い適期防除を実施する。発病後の防除では効果が劣るため、予防防除に努める。なお、散布にあたっては、同一系統の薬剤が連続しないようローテーション防除を行う。

(3) 秋期防除

秋期防除は翌春の一次伝染源となる芽鱗片部病斑を狙って防除を行う。秋期でも芽は生育しており、10月上旬には芽の基部に青々とした組織がみられる。この部分に黒星病菌が感染するため、秋期防除を徹底する。